



白扇集  
下





白扇集下

又通

い何や元いむり神道の去来

け君よまひのまをんかのまお  
維子啼るのほりてまはま  
のむえの席まおまをぬり  
う今ままその名くらり

かあると維子の啼りの様の惟我

け二句をまの光の使り  
おくれまをけ何の得あ  
まそまのつるのや



浄蓮社

極楽の彼岸にこそ十おふ  
 者ものむうと今此おお  
 十月や仰の月よと平のむ  
 うと此おおのむうと  
 月や移す移して一町  
 自忠 汝健

今から世を先かりするおの  
 月ものむうと平のむ  
 あの奥のそらおきかた  
 ちと山十といちと  
 却りけのむとらと  
 神をとうかめは  
 ゆう名のたへる  
 氷夏 胡仲 呂凡 東園 夕形 林お

浄蓮社  
十月



カトリ

新中

石動

雄神川らしりりおびとせ  
 あられり末地をこそ枯尾  
 月の輝し十日よりふそ  
 多よし小塚をちひて河  
 神をよ又その所のり  
 神志ある机の上乃り  
 温故  
 隘吹  
 蛙田  
 菅葉  
 螢暖  
 遅動

連速

カトリ

カトリ

山菜むわうき月といふ  
 阿そくとはるをらるよ  
 口切のむりりよ名のお  
 空つるありこちりり  
 古塚をらるよ世のふ乃  
 町向きる心立わよ  
 はれくと中よる  
 本物ふら少もの  
 香燭  
 束白  
 めを  
 小ね  
 石紫  
 先々  
 看山  
 雨秋



三  
塚の上よりお粟とらふ寸地も  
水色よくあふ時より趣の香  
青柳よりさし出さるおの乳  
ゆづりの念仰や粟のほろ寸  
うかりをらぬまのなやまの梅  
そのもし「笑」あふ今のおま  
一由

福光

詩の香ふ糸流あまの河  
乙子の月りりらうと塚の  
今よりその光をひらく塚の  
懐明の能くさししおの梅  
巴弓  
柳士  
是通  
吾吹

塚ヶ端

絶えしてとらふ糸下月  
燧ひくふや念仰くの節  
知足  
自宣



白鳥のありれをさるる一葉の香 山く

氷尼

茶儀不泪のわら 所なるふ 泣き  
涙のしるふを 井波と 海人

高松

栴牟らふとさるる 咲らり 十お

新夕の積り 泣くや 柳一枝 あり所  
木かりや 舟とさるる くと 塚のお 町角  
かゝるる 入るる 柳を 磨 柳のむ 河津  
けをを 何れとさるる 人 赤のむ 山人

急使

塚の村 枯るる 月よの 日 乱家 外故  
あふ人の 名りあり かつや あり 伝を 佳真







尾張

名古屋

ちれを嘆きつゝひのさるや栗のむ 彦川  
まらむも総書の世や塚の雪け通  
かの園のおよなりしや冬舟孫降  
訖りて朽とぬ各也岩のり 推之  
三氣はいてらくそ書塚の終 東推

海山とるくく今やおは鏡 湖花

本町のそつと法の松書 素洗

お糸の凡紙をひとりけりお  
ありしう今とるふとるもの  
さりとこのその光はひ

今うし系入りの新や雪のほ 如月

と何より

ふとぬりありて

泣けくとゆより泣けり 白雪



洛陽

柳好園

懷其六年

吾仲

その望ふてくふ子や帰む

懷其時

子直

ちらうしや時ふ取てく夕時角

懷厥海

菟何

あさふしあふよそれあつて海

懷厥山

巴廬

風や世をくくさくさく山

懷今生

え順

さう桑かしくれてくさくさ

懷好生

危字

あふくれそをくさくさ

クハ  
ヨモ  
ナ  
シ

イ  
ハ  
ク



七回

路健

ふらふら一字の作りし床に

わらわはふすまのおけり 林に

凡の山平ふ鳥の夢に 夕に

股をさらさら小橋の足 氷を

起くの勢ふ世のむし 赤星

そろそろ 里ふ新瑞と 詞端

名月の舞をまよへし 花を

さすし ねむし おりねむし 朔仲

川ひらふふささ 武吉入 更金

何ふはななく 例のあんしん えち

る降をまよへし 春と花を 燕人

柳ふお仰供の湯を 健

憶病の身ふさひ 柳 花

又て夢のおら 花



うやむねふもさきまの  
 智 美  
 川のさいてはめく  
 端  
 と食のふもさきまの  
 人  
 物陰にかりふか  
 仲  
 二階さよふの  
 全  
 八かう満をぬふ  
 古  
 京のちうさたは  
 人

額と争つてあす  
 健  
 隣の時あくと  
 死  
 と末孫のぼし  
 非  
 まきとさくら  
 麦  
 きつての心  
 足  
 善法とくま  
 端  
 石川  
 喜  
 お  
 仲



傘と横し、凡吹雪をよきまれば  
せくさく物のつらさぬる物  
け状を舟な使ふふのこ交  
不化しのおれと不化のち根  
地跡不葉殿かすんらるるの  
るをとめりし様のおま  
けらうの旗しふよりあし  
年のおらるを眉はるを  
全 人 女 飛 麦 尾

何よりそくちあはほ様嫌  
今う南うりうを  
まのむしあまのむしの  
辰のおきとをわらう  
り治の治のみおをさ  
戸の掛おぬのひよて  
り灯の光りるるふ月の  
あおさくうすまの  
全 人 女 飛 麦 尾







所さとおもふは月のみり候也 仲  
 多とを候ふは秋のふゆ候也 全  
 口かを中川をさるの湯の候也 七  
 味もを心と人といはるは行ふ人  
 候と候ふは國のふゆのふゆ候 健  
 高しとちふとあふしてあふ 五  
 大かを候ふは行の候候もて 九  
 形と候ふは行の候候もて 五

七かをとおのむのあやけ 青  
 山吹とあふ 若くあふ也 全

扇

扇のふゆは候ふの七候候もあふ候也  
 扇のふゆは候ふの七候候もあふ候也  
 扇のふゆは候ふの七候候もあふ候也  
 扇のふゆは候ふの七候候もあふ候也



仁念をこぼくくやあるをいは  
あつめればはるるよかたては  
嵐を吹ろくありとありは  
あつめてとて年々孫不慮ふ  
名ありありかきよ

十月のいし

東野坊

流とくよあつて

東を坊を井波よりあつて  
東武よりあつて城の石動ふ  
あつて再念をよろく  
流化のむくよとあつて  
の丸をかくれをくふ  
乃ハれをりらあ

よ向科

一子

あつての上あつて







取よせてまきく新編を先けし  
 押比のく人とまの月乳  
 考しきりて門の所をの中  
 考しきりておのくは龍衣  
 しりらきく咽のかりて暖さ  
 めてふされを柳と考す  
 考しきりて人のをかりて所也  
 おかしきそまの和号云  
 坊 坊 坊 坊 坊 坊 坊

考しきりて所をて暖て夕葉所  
 富小秋と考す 大根 坊  
 あまひ考て考すはあまひ少考  
 扱すぬきりおきよ月 坊  
 親の名とまけハ考す月所 坊  
 仰か恩を考すふふ考 坊  
 考して門の考す考す 坊  
 考の本考しきりて考す 坊



形へんりる痛あつた粥  
 枝  
 あれをよへ子と申す  
 坊  
 傘うあくらあつた  
 吾  
 しくくや核ふりて  
 成  
 り批を嘆ぬのぢり  
 山  
 筆  
 手ぬすたに  
 筆

寺町二条上町  
 かしら島

\*



